

おのきた  
尾北校長室から

第26号



風の行方 ～ 私の風

季節はもうすぐ、「風薫る五月」。風というものは、普段は私たちの生活とあまり関わりがないことから、その存在を意識することはめったにない。しかし、季節感を大切にしてきた日本人（日本語）には、時に風にも香りがあったり、色までもついたりする。初夏、風が薫る程度のものが少し強くなると、「青嵐（あおあらし/せいらん）」という言葉で、青葉を揺らす風を表す、といった具合である。

さて今回は、星野富弘（1946～）という詩画家の「花の詩画集」の作品の中で、コスモスの絵に添えて書かれている短い詩を紹介したい。

風は 見えない  
だけど木に吹けば 緑の風になり  
花に吹けば 花の風になる  
今 私を過ぎていった風は  
どんな風に なったのだろう



風が木々に吹けば緑色の風に、花に吹けば芳<sup>こぼ</sup>しい香りの風になる。では、私に吹く風はどんな風になっているのだろうか？ ——この詩が伝えようとするものは、「私は一体何者で、その私はどういう影響を周りの人に与えているのだろうか、静かに考えてみよう。」ということだと私は受けとめている。短くも味わい深い言葉だと思う。皆さんは、どう受けとめるだろうか？

この詩を書いた星野さんは、昭和45(1970)年に大学を卒業し、中学校の体育の教師になる。そして2か月後のクラブ活動指導中に頸椎を損傷し、手足の自由を失うことになる。入院中に口に筆をくわえて文や絵を書き始め、現在も詩画や随筆の創作活動を続けている。

2年前の本校のパンフレットにあった「未来を動かす尾北」というフレーズは、私もいいなと思う言葉なのだが、それは「未来の社会を動かす」大きな存在になろう、と呼びかけているだけではないのではないかと。そういうことは一部の人に任せてみることにして、私は皆さん一人一人には、まずは隣や周りにいる「人の未来を動かす」存在になることを期待したい。

皆さんは、自分の行動や言葉が周りの人にどのような影響を与えているか考えたことはあるだろうか？ 気付かないうちにも誰かに影響を与え、また、誰かから影響を受けている。先の詩にある「緑の風」や「花の風」のように、安らぎや喜び、信頼や感動などを与える存在になっているだろうか？ 家庭や学校、地域など、さまざまなつながりの中でかけがえのない存在として、互いに良い影響を与え合う——槇峰の丘に集う生徒の皆さんには、そういう人になってもらいたいと願っている。

しばし立ち止まって、自分自身のことについて考えてみよう。皆さん一人一人に吹く「私の風」は、どこで、どのような風になっている？

